

埼玉県における低地の周溝墓と建物跡（6）

—鳩ヶ谷・戸田・和光市域の低地遺跡について—

福 田 聖

要旨 埼玉県内の弥生時代後期から古墳時代前期の低地遺跡では、従来「方形周溝墓」とされてきた遺構に「周溝を有する建物跡」が含まれることが明らかになっている。今回、取り上げた鳩ヶ谷市域、戸田市域、和光市域の遺跡でも同様の遺構が認められる。この遺構の検討にはまだ様々な問題があるが、規模にいくつかのまとまりが見られることや、戸田・浦和・熊谷の離れた遺跡間で同様の特徴的な平面形を持つものがあることが明らかになった。また、当時の埼玉県内の低地遺跡では、竪穴住居跡、周溝を有する建物跡、方形周溝墓が併存する集落構成を取る可能性が高い。古墳時代中期の例も各々の低地で見られるようである。

1. はじめに

私はこれまで埼玉県内の低地遺跡について、及川良彦（及川1998）、飯島義男（飯島1998）両氏の、埼玉県内の低地の遺跡で従来「方形周溝墓」とされていたものは「周溝を有する建物跡」であるとする指摘を発端に検討を行ってきた。（福田1999a～c・2000a・2001）(1)～(3)では、方形周溝墓、周溝を有する建物跡双方を認定する一定の目安を得、試みに浦和市大久保領家片町遺跡について、両者を分離する作業を行い、ある程度この目安が有効であることを確認できた。(4)・(5)でも同様の作業を行い、さいたま市（旧浦和市）外東遺跡、戸田市鍛冶谷・新田口遺跡についてその様相を確認した。

既に述べたようにこの作業は私に三つの大きな問題を与えていた。その一つは方形周溝墓を検討する可能性についてである。二つめは、低地の遺跡の検討の問題である。今までの作業を通じて、あるいは本稿で行った作業を通じて、いかに低地の遺跡の検討を進めていくかという方向性の模索を行わねばならない。三つめは、これらの低地の遺跡の「周溝を有する建物跡」に見られる複雑な重複関係をもとにした層位論的な出土土器群の相対的前後関係の把握と、それに基づきながら認識論的な「型式」をいかに設定するかという問題である。この問題については、(4)で、一部作業を行った。

本稿は、主として2・3番目の問題について検討を行うため、(1)～(5)同様の作業を埼玉県内の低地遺跡について行おうと稿を起こしたものだが、後に述べるようにこの検討については改めて全く新たな作業として行うこととした。従って、本稿の位置づけはその基礎資料となる。当初は県内の残る低地遺跡の全てを対象としており、一部作業を終了しているが、私の個人的な都合のため、本稿ではその前半部分を掲載した。相変わらず帰納的記述に終始するため、読者には迂遠な作業につきあいあいいただくことをまず覚悟して頂きたい。

2、方形周溝墓、「周溝を有する建物跡」認定の目安

検討に入る前に(1)～(3)の作業によって得られた、方形周溝墓、「周溝を有する建物跡」を認定する目安を確認しておきたい。(福田1999c)

方形周溝墓については、①方台部が直線的な辺を持つこと、②周溝の平面形が全周もしくはコーナーの一つが切れる形態であるか、四隅切れであること、③施設としての溝中土坑が設けられていること、④周溝の幅が1m以上で、深さが50cmに満たないもの、つまり広く浅いものは少ないと、⑤壺の出土比率が高いこと、⑥出土土器の完形率が高いこと、⑦出土土器の出土位置がコーナーや陸橋部際、特定の周溝であること、⑧整然とした群構成であること、という8点がある程度の目安である。

周溝を有する建物跡については、①一辺の中央が切れる、またはそれに加えてコーナーの一つが切れるという開口部、②13m前後、10m前後の周溝内の規模、③壺に加えて甕が多いという器種構成、④周溝の幅と深さが相対的に狭く、浅いという4点である。

3、埼玉県南部の周溝墓と建物跡

第1図は、浅野信英氏が作成した荒川低地、中川低地、東京低地の遺跡分布図である。本稿で取り扱う範囲は、この図中にすべて網羅されている。市町村名としては、鳩ヶ谷市、川口市、戸田市、和光市が該当する。

今回取り上げる低地遺跡は、これまで取り上げた遺跡を含めていくつかのまとまりを認めることができる。草加市・東京都足立区を中心としたまとまり、鳩ヶ谷市を中心としたまとまり、戸田市を中心としたまとまりである。草加市・東京都足立区の遺跡群については別に検討する予定である。本稿では、第2、第3のまとまりについて取り扱う。

(1) 鳩ヶ谷市を中心とする低地遺跡

鳩ヶ谷市・川口市域の低地遺跡は、大宮台地の南側に広がる荒川低地の旧入間川流路沿いの自然堤防上に立地している。細かく独立した自然堤防も、ある時期のその流れにより形成されたものと考えられる。この中で、方形周溝墓あるいは周溝を有する建物跡が検出されている遺跡は、旧入間川左岸の鳩ヶ谷市辻字畑田第3遺跡(市川・浅野2002 H44直下)、右岸の三ツ和遺跡(黒済1995、浅野2001 H19)、辻字宮地第2遺跡(黒済2001 H45)、旧入間川支流の自然堤防上に立地する前田字六反畑第一遺跡(黒済・浅野2002 H23)、前田字前田第1遺跡(浅野2001 H42)である。川口市の二軒在家遺跡(春日2000)は前田字六反畑第一遺跡と同一の遺跡である。以下、主に弥生時代から古墳時代の遺構について概要を述べる。なお、以下で断りのない場合には鳩ヶ谷市内の遺跡と考えて頂きたい。

辻字畑田第3遺跡 教育委員会により1回の調査が行われている。(第2図) 弥生時代終末から古墳時代前期(2期)の「方形周溝」3基が検出されている。いずれも軸方向はほぼ同じだが、1号は南側に、3号は東側に開口部を持つ。



第1図 中川低地・荒川低地の遺跡分布図(浅野2001aより改図・転載)

三ツ和遺跡 教育委員会により現在までに22回の調査が行われている。総面積330,000m²にも上ると考えられている大遺跡である。(註1)弥生時代終末から古墳時代前期の遺構はI・II・III・VI・VII・VIII・X～XIX・XXI次調査で検出されている。このうち本シリーズで対象としている「周溝墓」はXIII～XIX次調査で検出されている。報告されているものは隣接する調査区のXIII・XVII次、それより南に300メートルほど離れたXVI次調査分である。

XIII・XVII次調査では、古墳時代前期(3期)の「方形周溝墓」4基が検出されている。(第3図)3号のみが軸方向がやや北側に振れるが、それ以外はほぼ同じ軸方向で構築されている。1号のみが西にやや離れた位置にある。

XVI次調査では、古墳時代前期(3期)の「方形周溝墓」3基が検出されている。(第3図)搅乱が著しく、どの遺構も全体の様相が分からぬが、ほぼ同じ軸方向で近接して構築されていると考えられる。

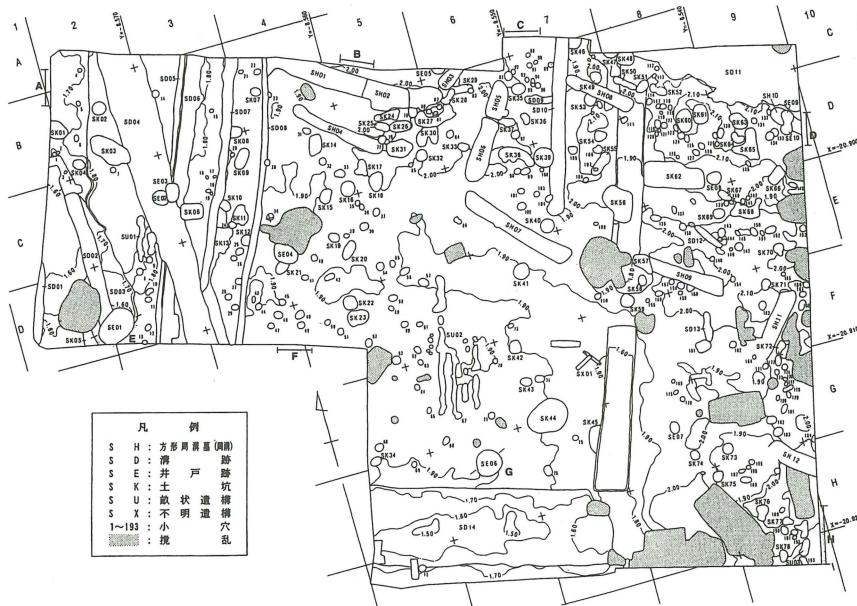
前田字六反畠第1遺跡 教育委員会により1回の調査が行われている。(第4図)川口市の二軒在家遺跡に隣接した北側にあり、同一の遺跡である。古墳時代前期(4期)の「方形周溝墓」が1基検出されている。調査区の北側から北西コーナー部分のみが調査され、二重の周溝を持つものとされている。

二軒在家遺跡 川口市遺跡調査会により1回の調査が行われている。(第4図)鳩ヶ谷市の前田字六反畠第1遺跡に隣接した南側にあり、同一の遺跡である。調査区の西端から、古墳時代中期の「溝

辻字畠田第3



前田字前田第1



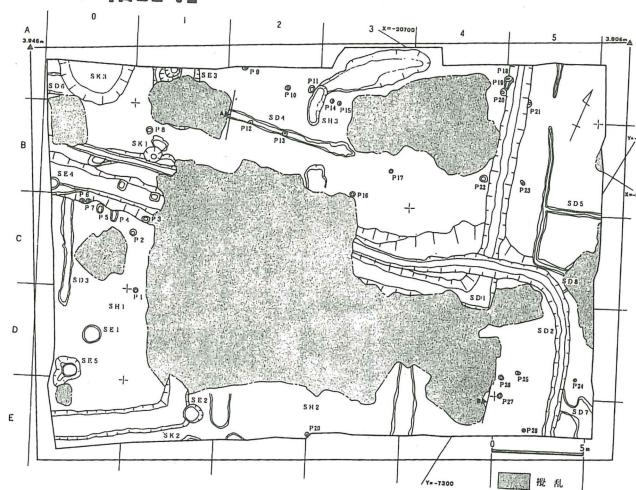
第2図 各遺跡の全測図(1) (各報告書より転載 S = 1 : 400)

状遺構」2条が検出されている。東側の溝の中央が開口するものである。

前田字前田第1遺跡 教育委員会により1回の調査が行われている。古墳時代前期(Ⅲ期)の「方形周溝墓」4基が検出されている。(第2図) ほぼ同じ軸方向で、一定の距離を持って構築されている。1号は2重の周溝を持つものと推定されている。その他のものは四隅切れの平面形である。

鳩ヶ谷市域、川口市域の遺跡からは、本シリーズで検討対象としている「周溝墓」が17基検出されている。(表1) これらを先の目安と順番に照合する。

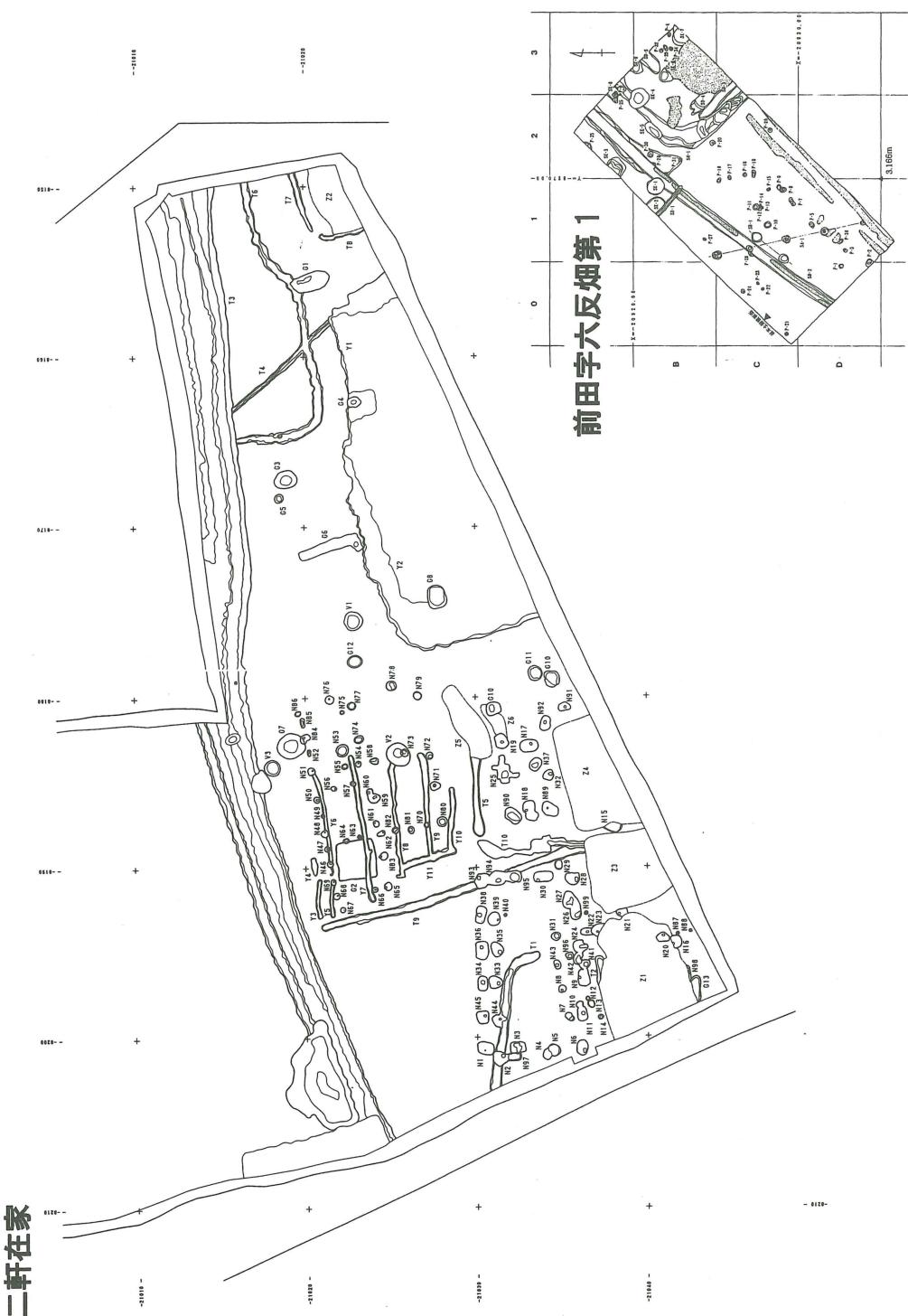
三ツ和XVI



三ツ和XVII



第3図 各遺跡の全測図(2) (各報告書より転載 S = 1 : 400)



第4図 各遺跡の全測図(3) (各報告書より転載 S=1:400)



第5図 各遺跡の全測図(4) (各報告書より転載 S=1:400)

まず、方形周溝墓についてである。平面形態には方形、台形、隅丸方形、不整方形がある。周溝が全周あるいは一隅切れ、四隅切れのもので区画内が直線的な辺をもつものは、三ツ和XⅦ-1～4号である。前田字前田第1-2等も直線的な辺を持つが、周溝の深度がなく、確実ではない。(目安①・②)

施設としての溝中土坑は認定するのが困難である。またピットが周溝内にあるものもあるが、施設であるかは明らかでない。(目安③)

周溝の規模(第9図)が、幅1m以上、深さ50cm以上のものは辻字畠田第3-2号、三ツ和XⅥ-1号である。辻字畠田第3-1号は、深さはやや浅いが幅は2mを超えている。また、周溝の幅が1mを超えるものは三ツ和XⅦ-4号、前田字六反畠第1-1号、前田字前田第1-2～4号である。深さが50cm程度のものは辻字畠田第3-3号である。(目安④)

器種構成(第10図)で壺あるいはそれに加えて小型壺の出土比率が特に高いものは見られない。甕・台付甕とほぼ同じ割合である。(目安⑤)

遺存率の高いものはほとんど見られない。辻字畠田第3-1号で台付甕と鉢、三ツ和XⅥ-3号で壺の、前田字前田第1-2号で甕の遺存率が高いのみである。(目安⑥)底部穿孔壺が出土しているものは見られない。

出土状況は破片が散在して出土するものが多い。辻字畠田第3-1号では周溝の開口部際から、前田字前田第1-2号では南溝から集中して出土しているが、甕が主体で周溝墓の出土状況とは異なる。

群構成については、ほとんどが部分的な調査のため詳らかでないが、重複関係等は認められず、いずれも隣接するものと一定の間隔を置いて造営されている。(目安⑧)

以上の目安との照合の結果、「周溝墓」と断言できるものはないが、平面形態や周溝の規模から三ツ和XⅦ-1～3号を「周溝墓の可能性のあるもの」(第11図)として認定した。

次に周溝を有する建物跡・住居跡について見る。平面形態で不整な方形を呈し、一辺の中央が切れるもの、あるいは更にもう一箇所のコーナーが切れるものは、辻字畠田第3-1・3号、三ツ和XⅥ-3号、二軒在家-1号である。(目安①)

周溝区画内の規模は、辻字畠田第3-3号が6.1mで最小だが、辻字畠田第3-1号が10.0mで最大である。特に大型・小型のものはない。(目安②)

器種構成で台付甕・甕の出土比率が高いものは、前田字六反畠第1-1号、前田字前田第1-2号である。台付甕・甕に加えて壺・小型壺の出土比率が高いものは辻字畠田第3-1・2号、三ツ和XⅦ-1号である。(目安③)

周溝の規模が、幅1m以上で深さ50cm以下のものは、先にあげた三ツ和XⅦ-4号、前田字六反畠第1-1号、前田字前田第1-2～4号である。幅1m以下で、深さが50cm以下のものは、辻字畠田第3-3号、三ツ和XⅦ-1～3号、二軒在家1号、辻字宮地第2号である。(目安④)

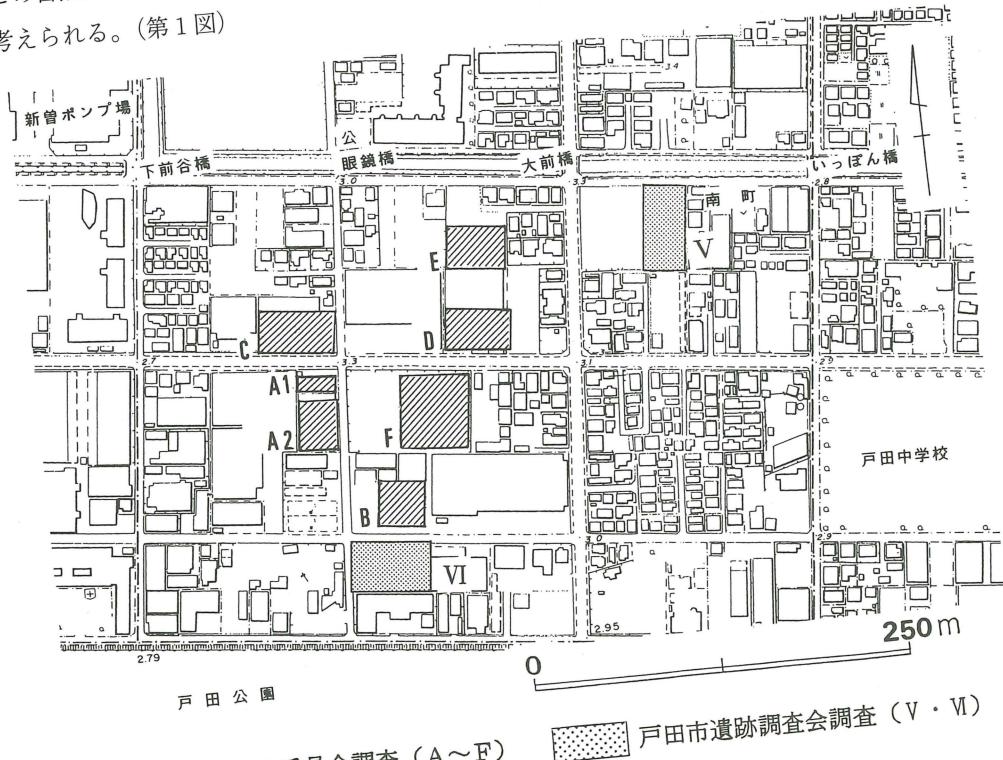
以上の目安との照合の結果、周溝を有する建物として、辻字畠田第3-1・3号、前田字六反畠第1-1号を認定した(第12図)。ただしこの内、辻字畠田第3-1号のように、周溝幅が2mを超えるものもある。また、規模にも大小があり、辻字畠田第3-3号は住居跡の掘り方や岡本淳一郎氏がいう「周溝遺構」(岡本1998)である可能性もある。

また、いずれもの目安を複数満たし、どちらかに振り分けるのが困難なもの、部分的なもので判断できないものを第13図に示した。辻字畠田第3-2号、三ツ和X VI-1~3号、前田字前田第1-1~4号、辻字宮地第2-1号、二軒在家1号が該当する。平面形や周溝の規模等からは、いずれも「周溝を有する建物跡」の可能性が高いが、今一つ確実ではない。

次に周溝墓と周溝を有する建物跡がどのように集落を構成していたかを考えてみたいが、ほとんどの部分的な調査であるため検討が困難である。調査が22次にも及んでいる三ツ和遺跡は、まだ未構成される集落域という分布が考えられる。ただし、その場合にはシリーズ(5)の鍛冶谷・新田口遺跡で述べたように、溝を持たない堅穴住居跡と周溝を有する建物跡が併存していたか、あるいは時期をもっているのかといった点を検討する必要があり、現段階では可能性にとどまざるを得ない。また、隣接する前田字六反畠第1遺跡と二軒在家遺跡は、後者が古墳時代中期の周溝を有する建物跡であるとすれば、かなり大規模な集落と考えられる。

(2) 戸田市を中心とする低地遺跡

戸田市域を中心とする遺跡群は、大宮台地の南側に広がる荒川低地にあり、鳩ヶ谷市域の遺跡群とは異なる時期、異なる流路の旧入間川によって形成されたと考えられる広い自然堤防上に立地する。この自然堤防は現荒川の左岸に当たるが、現在の流路ともまた異なる流路により形成されたものと考えられる。(第1図)



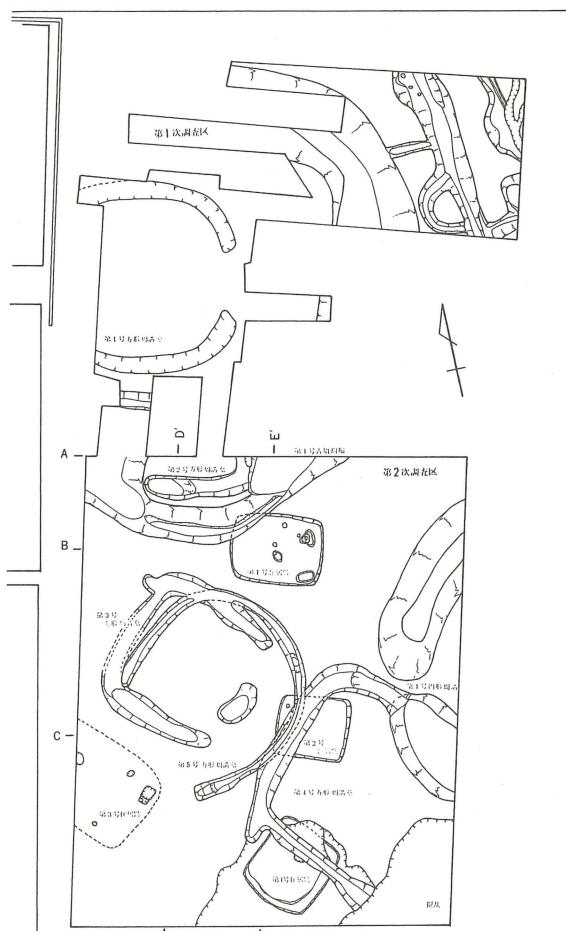
第6図 南原遺跡調査区位置図 (小島1996より転載)

自然堤防上には、弥生時代後期から古墳時代前期を中心とする多くの遺跡が分布しており、本シリーズ(5)で取り上げた鍛冶谷・新田口遺跡もこの自然堤防上にある。鍛冶谷・新田口遺跡を除いて、方形周溝墓あるいは周溝を有する建物跡が検出されている遺跡は、前谷遺跡（塩野・伊藤1978 第1図89）、南原遺跡（塩野・伊藤1970・1972、小島1991・1996 第1図87）、南町遺跡（福田1987 第1図86）である。なお、以下で断りのない場合には戸田市内の遺跡と考えて頂きたい。

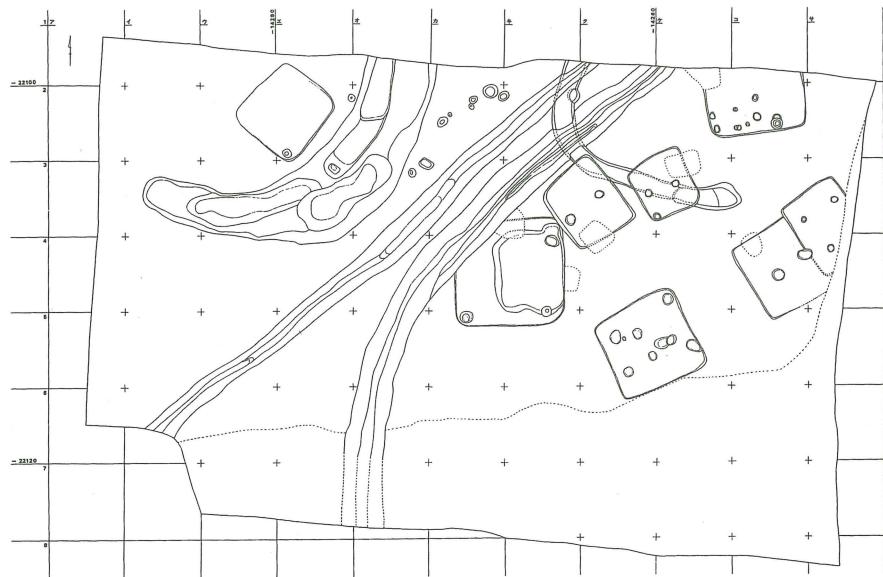
前谷遺跡 教育委員会により1回の調査が行われている。（第5図）古墳時代前期（4期）の「方形周溝墓」2基、土坑2基が検出されている。「方形周溝墓」2基は一定の間隔をおいて造られているが、2号は部分的な調査であるため、詳細は不明である。

南原遺跡 教育委員会により4回、6地点の調査、遺跡調査会により2回の調査が行われている。（第6図）南町遺跡の南約300メートルの位置にあり、谷を隔てた対岸に位置する。総面積50,000m²にも上ると考えられている大遺跡である。弥生時代終末から古墳時代前期の遺構は教育委員会調査の

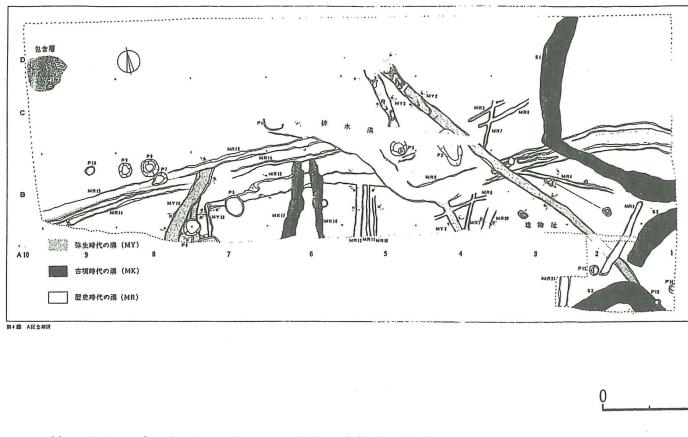
南原A区



南原VI次



榎堂A区



第8図 各遺跡の全測図(5) (各報告書より転載 S = 1 : 400)

A・B・D区、遺跡調査会調査の第V・VI次調査で検出され、部分的な調査ながら竪穴住居跡が23軒検出されるなど大きな成果が得られている。このうち本シリーズで対象としている「周溝墓」はA・B・D区、第VI次調査で検出されている。(第7・8図)

A区からは古墳時代前期の竪穴住居跡3軒、「方形周溝墓」5基(3期)が検出されている。B区からは古墳時代中期の竪穴住居跡1軒、時期不明だがそれに切られる「方形周溝墓」1基が検出されている。D区からは古墳時代前期(3期)の「方形周溝墓」1基が検出されている。VI次調査区からは古墳時代前期の竪穴住居跡8軒、「方形周溝墓」1基(4~5期)が検出されている。

南町遺跡 遺跡調査会により1回の調査が行われている。(第5図) 南原遺跡の北約300メートルの位置にあり、谷を隔てた対岸に位置する。弥生時代終末から古墳時代前期の遺構は「方形周溝墓」

表1 鳩ヶ谷・戸田・和光市域の「周溝墓」

遺跡名	遺構No.	平面形	開口部	周溝内	規模(m)		周溝幅(m)		深さ(m)		施設	備考
					長軸	短軸	最狭	最広	最浅	最深		
辻字畠田第3	1	隅丸方形	1-中央	隅丸方形	10.0	8.0	1.3	2.0	0.2	0.4		遺物開口部集中
	2	—	—	—	(8.4)	(5.1)	0.7	1.0	0.2	0.8		北側コーナー外壁沿集中
	3	隅丸方形	1-中央	隅丸方形	6.1	5.4	0.5	0.9	0.3	0.5	土坑	(土坑?)
三ツ和(XVI)	1	方形	方形	方形	—	—	1.3	1.5	0.4	0.5		擾乱で大部分壊れる
	2	—	(1-隅か)	—	—	—	0.7	1.2	0.1	0.3		一部のみ
	3	不整方形	—	不整方形	8.3	—	0.8	1.8	0.2	0.4		
三ツ和(XVII)	1	方形	4隅	方形	6.2	5.8	0.4	0.9	0.1	0.3		2辺のみ
	2	方形	—	方形	8.0	—	0.3	0.9	0.1	0.3		
	3	台形	1-隅	台形	6.9	6.4	0.2	0.7	0.1	0.4		
	4	方形	—	方形	7.0	6.7	0.6	1.2	0.2	0.4		
前田字六反畠第1	1(外)	隅丸方形か	—	隅丸方形	—	—	1.1	1.4	0.2	0.3		
	1(内)	隅丸方形か	—	隅丸方形	—	—	0.5	1.5	0.2	0.4		2重の溝
二軒在家	1・2号溝	台形	1-中央	台形	7.2	5.0	0.4	0.6	0.1	0.3		一部のみ
前田字前田第1	1(SHO2,3)	方形	(1-隅か)	(方形)	—	—	0.8	1.5	0.1	0.2		
	1(SHO4)	—	—	—	—	—	0.5	0.8	0.1	—		
	2	方形	3	方形	8.3	—	0.8	1.1	0.2	0.4	土坑、段	
	3(A)	—	—	—	9.6	—	0.7	1.0	0.1	0.2		
	4	方形	—	方形	—	—	0.8	1.0	0.1	0.2		
辻字宮地第2	1	方形	—	方形	—	—	0.6	0.7	0.1	—		
前谷	1	隅丸方形	—	隅丸方形	12.5	10.9	0.8	1.3	0.3	0.8		
	2	—	—	—	—	—	0.4	0.8	0.6	1.0		
南原	1(A)	不整円形	1-中央	不整円形	8.8	—	0.6	1.0	0.1	0.3		
	2(A)	方形	—	方形	—	—	1.3	—	0.3	—	土坑	一部のみ、性格不明
	3(A)	方形	2-隅	方形	6.1	6.0	0.7	1.1	0.1	0.5	突出部、土坑	5周より古
	4(A)	方形	—	方形	8.6	—	0.7	1.2	0.5	1.2	突出部、土坑	2、4号住より新、5周より古
	5(A)	不整円形	一辺開口	不整円形	9.0	8.5	0.5	0.8	0.4	0.8	段	3、4周より新
	6(B)	(隅丸方形)	—	(隅丸方形)	—	—	0.7	0.8	0.5	0.6		一部のみ、5号住より古
	7(D)	—	—	—	—	—	0.9	1.1	0.3	0.7		一部のみ、8住より古
	VI-1	隅丸方形	—	隅丸方形	9.2	—	0.8	1.1	0.3	0.5		一部のみ、3、4住より古
南町	1	隅丸方形	—	方形	14.6	—	1.4	2.0	0.5	1.0	土坑、段、テラス	中心埋葬施設
	2	隅丸方形	—	方形	—	—	1.3	—	0.5	0.5		
榎堂	1	方形	—	方形	—	0.5	0.5	1.3	0.2	0.5		
	2	—	—	—	—	—	0.9	1.3	0.3	0.5	土坑	
	3	—	—	—	—	—	1.0	1.2	0.2	0.3		

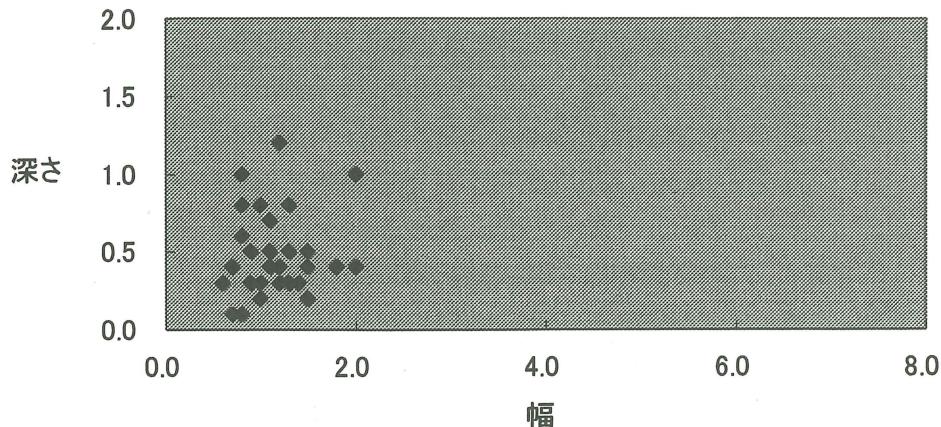
2基(3期)が検出されている。

戸田市域の遺跡からは、本シリーズで検討対象としている「周溝墓」が12基検出されている。(表1)これらを先の目安と順番に照合する。

まず、方形周溝墓についてである。平面形態には方形、隅丸方形、不整方形がある。周溝が全周あるいは一隅切れのものは、調査が部分的なものであることもあり認められない。周溝区画内が直線的な辺をもつものは、南町1号のみである。(目安①・②)

施設としての溝中土坑は、及川氏に指摘されたように(及川2001)、何をもって施設とするかという点が曖昧である。それでも、かつてあげた(福田1991)南町1号の南西コーナーに造られた径2.1m×90cm、深さ20cmのものは、テラスを伴い、大型の壺が破碎された状態で焼土や炭化物とともに出土するなど、周溝墓、建物跡いずれかのという意味ではなく、何らかの施設である可能性が高いように思われる。(目安③)

周溝の規模(第9図)が、幅1m以上、深さ50cm以上のものは前谷1号、南原3・4・7号、



第9図 周溝の幅と深さ

南原VI次1号、南町1・2号で、大半のものが幅広で深い周溝を持つ。前谷2号、南原5・6号は幅は狭いが深い。(目安④)

器種構成(第10図)で壺あるいはそれに加えて小型壺の出土比率が高く、半ばを占めるものは、前谷1号、南原VI次1号、南町1号のみである。特に前谷1号は壺が12個と群を抜いている。(目安⑤)

遺存率の高いものは南原7号で壺・鉢・甕が、南原VI次1号で広口壺が、南町1・2号で壺が出土しているのみである。(目安⑥) 底部穿孔壺が出土しているものは、南町1号のみで、いずれも焼成後である。

出土位置はかつて指摘したように破片が一面に出土するものが多い。(福田1994) 南町1号では、南東コーナー付近で底部穿孔の底部のみがまとまって出土している。(目安⑦)

群構成については、南原A区で激しい重複が認められ、それ以外では一定の間隔を置いて造られている。(目安⑧)

以上の目安との照合の結果、複数の目安と合致するものを中心に、南町1号と同一の墓域を形成すると思われる南町2号を「周溝墓」として認定した。(第11図)

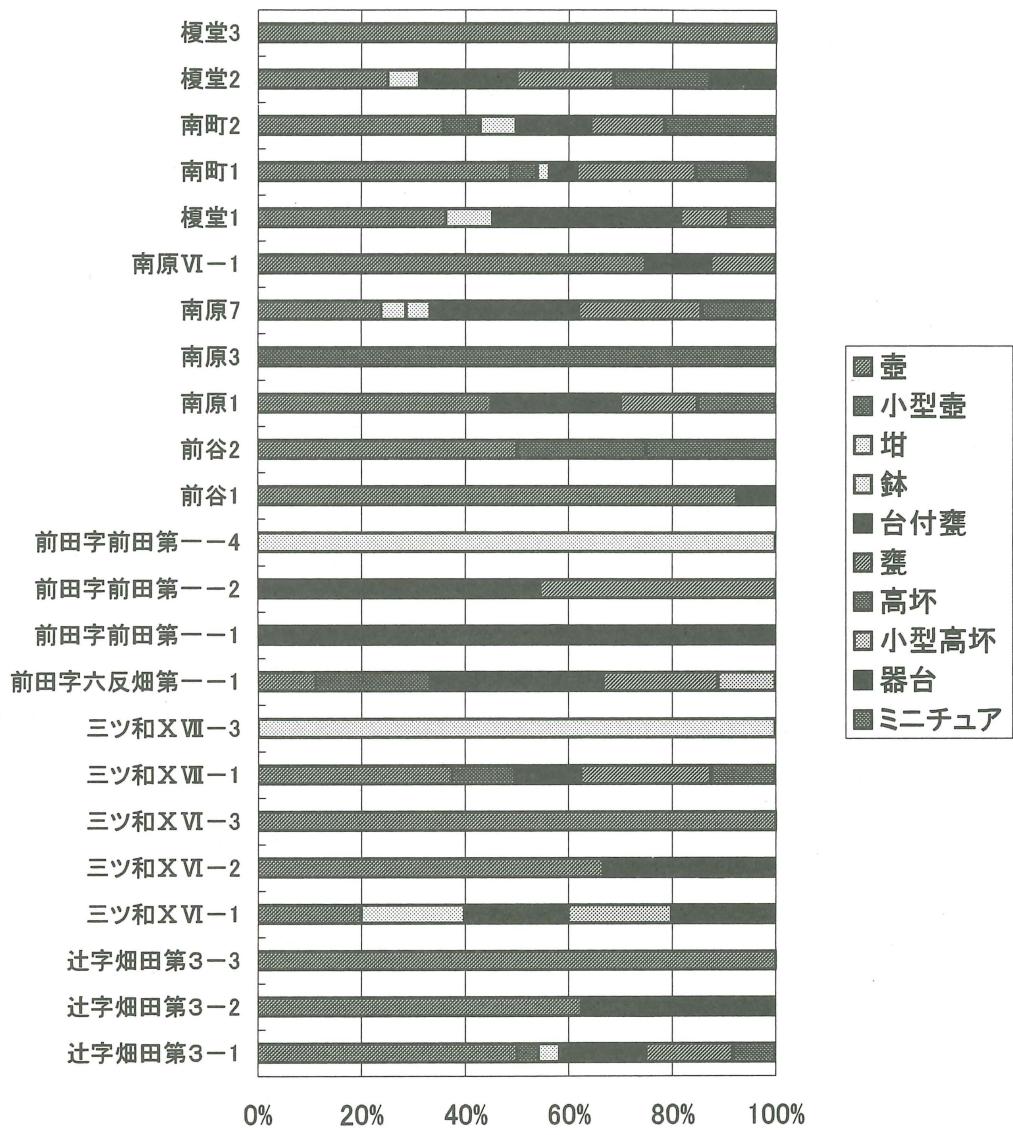
次に周溝を有する建物跡・住居跡について見る。

平面形態で不整な方形を呈し、一辺の中央が切れるもの、あるいは更にもう一箇所のコーナーが切れるものは、前谷1号、南原1・3・5号、南原VI次1号である。(目安①) また、南原3・4号は一辺が突出する形態である。

周溝区画内の規模は、6～9mの南原3～5号、南原VI次1号と12.6mの前谷1号の二者がある。(目安②)

器種構成で壺・小型壺に加えて台付甕・甕の出土比率が高いものは、南原1・7号である。(目安③)

周溝の規模(第10図)が、幅1m以上で深さ50cm以下のものは、南原1～3号、南原VI次1号である。幅1m以下で、深さが50cm以下のものではなく、周溝墓の項で述べたように周溝幅が狭く

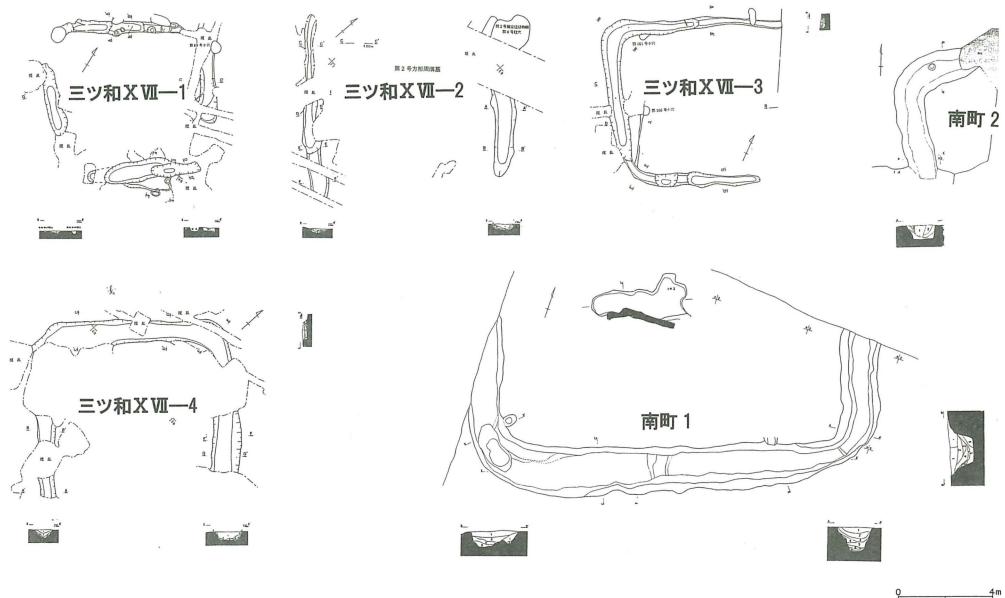


第10図 器種構成

てもいずれも深めである。(目安④) また、逆に前谷2号、南原5・6号は幅1m以下で深さが50cm以上ある。

遺構の重複については先述のとおりで、重複する遺構が必ずしも建物跡のみというわけではないが、その可能性の高いものが含まれると考えられる。南原3・5号は入れ子状になっている。周溝墓の拡張については、既に近藤英夫氏(近藤1992)や伊藤敏行氏(伊藤1993)によって検討されているが、こうした入れ子状の重複は知られていない。大久保領家片町遺跡や外東遺跡、鍛冶谷・新田口遺跡でも認められたこれらの例は、建物跡であることの傍証である可能性が高い。

以上の目安との照合の結果、「周溝を有する建物跡」として、前谷1・2号、南原1・3~5号、南原VI次1号を認定した(第12図)。規模が2分されることには注意が必要であろう。



第11図 周溝墓 (S=1:320)

また、いずれもの目安を複数満たし、どちらかに振り分けるのが困難なもの、部分的なもので判断できないものを第13図に示した。南原2・6・7号が該当する。

次に、周溝墓と周溝を有する建物跡がどのように集落を構成していたかを考えてみたい。南町遺跡は周溝墓群のみの調査であるため明らかでないが、北側に小さな谷を隔てて位置する上戸田本村遺跡の墓域である可能性も考えられる。南原遺跡は、A区、VI次調査区で、ほぼ同時期の竪穴住居跡と周溝を有する建物跡の双方が認められる。(1)でも述べたように両者が併存していたか、あるいは時期差をもっているのかといった点を検討する必要があり、現段階では可能性にとどまらざるを得ない。至近の鍛冶谷・新田口遺跡も同様の状況であることから、合わせて検討する必要があるだろう。

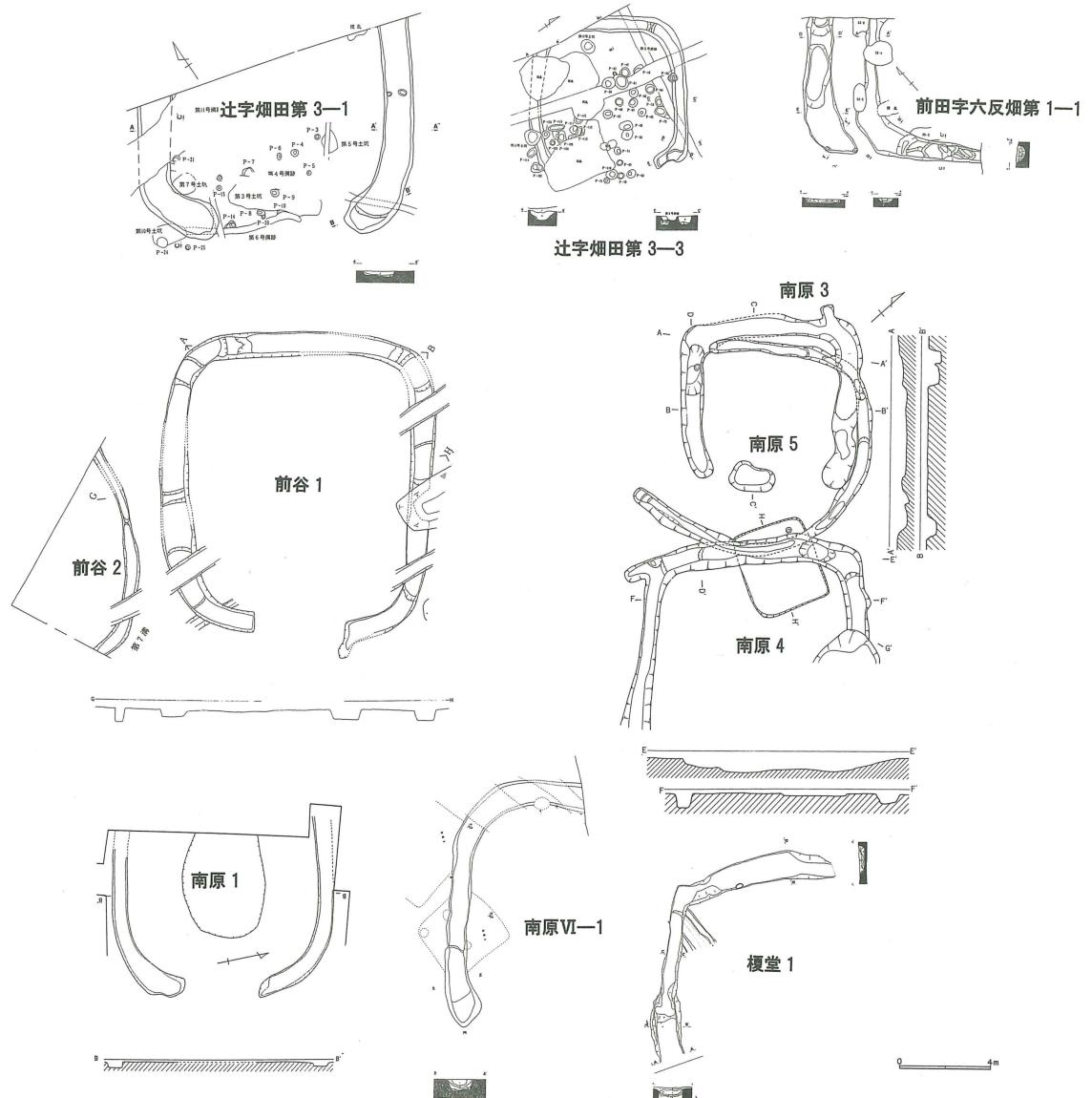
遺構の重複関係では、南原VI次1号が同時期の3・4号住居跡に切られている。

(3) 和光市を中心とする低地遺跡

和光市域を中心とする遺跡は、武藏野台地の北側に広がる荒川低地の自然堤防上に位置する。戸田市の遺跡群（左岸）の現荒川を挟んだ対岸（右岸）に当たる。現在の流路とは異なるものの、それに比較的近い流路により形成されたものと考えられる。（第1図）この右岸の自然堤防は、左岸ほどの発達が見られず、比較的狭く点的に存在し、遺跡が散在して分布している様相を示している。

榎堂遺跡 市史編さん室により1回の調査が行われている。（鈴木ほか1983 第1図91、第8図）古墳時代前期（4期）の「方形周溝墓」3基、溝2条が検出されている。「方形周溝墓」3基は調査区内においては重複していないがごく近接しており、本来重複関係にあるものと考えられる。1号は遺構の南東側、2号は西溝の開口部、3号は北コーナーが検出されている。

平面形態は1号がやや内側に弧を描いた方形で、2号も部分的ながら弧を描いており、直線的な



第12図 周溝を有する建物跡 (S = 1:320)

辺を持つとは言い難い。

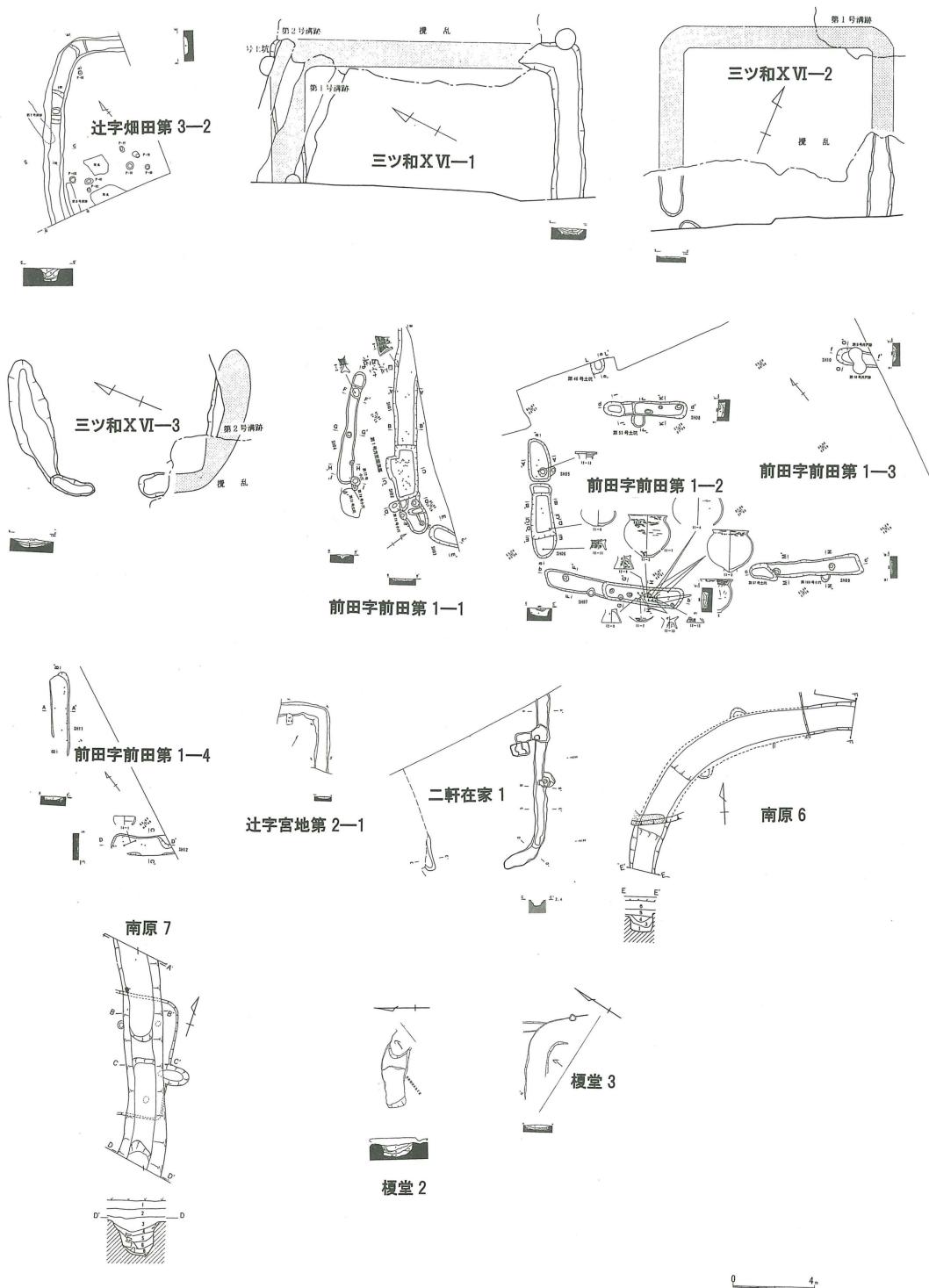
開口部は2号のみで検出されているが、一辺の中央が切れる形態になる可能性が考えられる。

施設としての溝中土坑は認定するのが困難である。かつて、上層から多量の焼土・炭化物・灰色粘土と土器が出土した2号の開口部際のものを「祭祀施設」(福田1991)としたが、それらが建物の廃棄物とも考えられ、現在では保留したいと考えている。だが、周溝墓、建物跡いずれかのという意味ではなく、何らかの施設である可能性は高い。

周溝の規模(第9図)は、幅がいずれも1m以上である。1・2号は深さも50cmある。

器種構成(第10図)は壺・小型壺に加えて台付甕・甕の出土比率が高く、ほぼ同じ割合である。

出土遺物で遺存率の高いものは2号の台付甕のみである。



第13図 不明な周溝墓 (S = 1 : 320)

出土位置は、2号で開口部際から集中して出土しているほかは、各周溝から散在して出土している。また、遺構の重複については、前述のように激しい重複が予想される。重複する遺構が必ずしも建物跡のみというわけではないが、その可能性の高いものが含まれると考えられる。

以上の様相から、まず1号は周溝を有する建物跡の可能性が高いように思われる。(第12図) また、重複関係を有する2・3号は、周溝を有する建物跡である可能性が高いが、部分的な調査であるため今一つ確実でない。ここでは判断を保留したい。(第13図)

4、小結

以上のように、鳩ヶ谷市域、戸田市域の方形周溝墓、周溝を有する建物跡の認定を進めてきた。シリーズ(3)～(5)でもさまざまな様相が見られたが、更に多様な様相が明らかになり、2で示した「目安」が、あくまでその地位に留まらざるを得ないのが分かる。

ここでは最後に、周溝を有する建物跡の様相について若干述べておきたい。

周溝の規模については、幅が広いものにも、狭いものにも浅深がある。

周溝区画内の規模は鳩ヶ谷市域の遺跡群で、6～9mのまとまりがあるのが分かり、前稿までは、また異なる規模の一群と位置づけられる。前述のように規模は大きいが、岡本淳一郎氏の「周溝遺構」に該当する可能性もある。(岡本1998) 大久保領家片町遺跡、鍛冶谷・新田口遺跡、今回取り上げた三ツ和遺跡、南原遺跡で見られた「竪穴住居跡」・「周溝を有する建物跡」・「方形周溝墓」が併存する可能性が高い集落構成も、このような、景観例が増加してくると当時の低地の大規模拠点集落での一般的な建物・墳墓の景観であった可能性も考えられる。

二軒在家遺跡の例が「周溝を有する建物跡」であるならば、騎西町小沼耕地遺跡(田中1991)の例もあり、古墳時代中期でも中川、荒川の各々の低地でこの種の遺構が造られ続けたことになる。

同時に、南原遺跡等の様相はやはり近隣の鍛冶谷・新田口遺跡の様相と通じるものがあり、遺跡群間における広い検討と遺跡群内における検討という二つの構えが必要であることを教えてくれる。

それは、今回私の個人的な事情のために掲載できなかった旧浦和市内や川島町の資料についても同様である。例えば南原3・4号で見られた突出は、旧浦和市下大久保新田4次1号(山田・駒見1998)、熊谷市小敷田遺跡4・15・18・19号(吉田1991)でも認められる。「竪穴住居跡」・「周溝を有する建物跡」・「方形周溝墓」が併存する可能性が高い集落構成も、大久保領家片町遺跡以外の遺跡でも認められる。

このように、周溝を有する建物跡一つとっても問題が多岐にわたり、慎重な検討が望まれることが分かる。それは、方形周溝墓、あるいは土器、竪穴住居跡についても同様である。冒頭に述べたこれまで提示してきた三つの問題にも、もっと慎重で緻密な検討が必要であると考えるに至った。片手間で対応できるものではない。何度も土器について扱うといっておきながら先延ばしにしてきたが、改めて先延ばしにさせて頂き、次稿において本シリーズを閉じ、新たに『低地と台地の考古学』というシリーズとして、土器、住居跡、建物跡、方形周溝墓について論じることにしたい。

次稿では、旧浦和市内をはじめ、残された資料について基礎的作業を行う予定である。

(2003年3月15日記)

謝 辞

本稿を草するに当たり、これまでと同様に多くの方々から御教示を受けた。鳩ヶ谷市内の遺跡については、浅野信英氏、黒済和彦氏、市川康弘氏に御教示いただいた。戸田市内の遺跡については、小島清一氏に日頃から御教示頂いている。和光市の遺跡については鈴木一郎氏にご教示いただいた。瀧瀬芳之、君島勝秀、松岡有希子氏にもさまざまご意見をいただいた。いつものように、低地遺跡の検討に当たっては、方形周溝墓研究会の面々に多くの教唆を受けている。以上の方々に末筆ながら、感謝申し上げる次第である。また、体調が悪い中私を常に援助し、図版作成や表入力を協力してくれた福田恵子にも感謝したい。

註

1、三ツ和遺跡については、過去22回の調査が行われているが、全体は住所を地点名として表記されている。「一次調査」の表記はそれとは別にあるが、調査順ともかならずしも一致していない。本稿では浅野2001で示された「一次調査」も含めた通算の回数をローマ数字により表記した。

参考・引用文献

- 浅野信英 2001 a 『前田字前田第1遺跡』 鳩ヶ谷市埋蔵文化財調査報告書第15集 鳩ヶ谷市教育委員会
2001 b 『三ツ和遺跡－八幡木1丁目19-4地点－』 鳩ヶ谷市埋蔵文化財調査報告書第17集 鳩ヶ谷市
教育委員会
- 市川康弘・浅野信英 2002 『辻字畠田第3遺跡』 鳩ヶ谷市埋蔵文化財調査報告書第21集 鳩ヶ谷市教育委員会
飯島義雄 1998 「古墳時代前期における「周溝をもつ建物」の意義」『群馬県立歴史博物館紀要第19号』 P 65
～78 群馬県立歴史博物館
- 伊藤敏行 1993 「方形周溝墓の「拡張」」『学芸研究紀要第10集』 P 15～28 東京都教育委員会
- 岡本淳一郎 1997 「“周溝をもつ建物”について」『埋蔵文化財調査概要－平成8年度－』 P 133～139 (財)富山
県文化振興事業団埋蔵文化財調査事務所
1998 「弥生時代周溝遺構に関する一考察」『富山考古学研究創刊号』 P 45～52 (財)富山県文化
振興事業団埋蔵文化財調査事務所
- 及川良彦 1998 「関東地方の低地遺跡の再検討－弥生時代から古墳時代前半の「周溝を有する建物跡」を中心
に－」『青山考古第15号』 P 1～34 青山考古学会
1999 「関東地方の低地遺跡の再検討(2)－「周溝を有する建物跡」と方形周溝墓および今後の集落
研究への展望－」『青山考古第16号』 P 35～66 青山考古学会
- 春日 肇 2000 『二軒在家遺跡』 川口市遺跡調査会報告第18集 川口市遺跡調査会
- 木戸春夫 1999 『小沼耕地遺跡Ⅱ』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第247集 (財)埼玉県埋蔵文化財調査
事業団
- 黒済和彦 1995 『鳩ヶ谷市三ツ和遺跡－八幡木2丁目6番地3・4号地点－』 鳩ヶ谷市埋蔵文化財調査報告書
第8集 鳩ヶ谷市教育委員会
2000 『前田字六反畠第1遺跡』 鳩ヶ谷市埋蔵文化財調査報告書第12集 鳩ヶ谷市教育委員会

- 2001 『辻字宮地第2遺跡』 鳩ヶ谷市埋蔵文化財調査報告書第18集 鳩ヶ谷市教育委員会
- 小島清一 1991 『南原遺跡V』 戸田市遺跡調査会報告書第3集 戸田市遺跡調査会
- 1996 『南原遺跡VI』 戸田市遺跡調査会報告書第5集 戸田市遺跡調査会
- 近藤英夫 1992 「方形周溝墓雑考」『西相模考古第1号』 P 42~45 西相模考古学研究会
- 塩野 博・伊藤和彦 1970 『南原(高知原)遺跡第1次発掘調査概要』 戸田市文化財調査報告Ⅲ 戸田市教育委員会
- 1972 『南原(高知原)遺跡第2・3次発掘調査概要』 戸田市文化財調査報告V 戸田市教育委員会
- 1978 『前谷遺跡発掘調査概要』 戸田市文化財調査報告XⅢ 戸田市教育委員会
- 鈴木敏弘・山崎千登勢・山口徹・大木由美子 1983 『榎堂遺跡発掘調査報告書』 和光市史編さん資料6 和光市史編さん室
- 田中正夫 1991 『小沼耕地遺跡』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第100集 (財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 福田 聖 1987 『南町遺跡I』 戸田市遺跡調査会報告書第1集 戸田市遺跡調査会
- 1991 「溝中土坑小考」『研究紀要第8号』 P 9~36 (財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 1994 「方形周溝墓と土器I」『研究紀要第11号』 P 1~54 (財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 1999 a 「埼玉県における低地の周溝墓と建物跡(1) 一周溝墓とは何かを探るための試みー」『埼玉考古第34号』 P 31~54 埼玉考古学会
- 1999 b 「埼玉県における低地の周溝墓と建物跡(2) 一周溝墓とは何かを探るための試みー」『研究紀要第15号』 P 35~72 (財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 1999 c 「埼玉県における低地の周溝墓と建物跡(3) 一周溝墓とは何かを探るための試みー」『土曜考古第23号』 P 59~80 土曜考古学研究会
- 2000 a 「埼玉県における低地の周溝墓と建物跡(4)」『埼玉考古第35号』 P 65~78 埼玉考古学会
- 2000 b 『方形周溝墓の再発見』 同成社
- 2001 「埼玉県における低地の周溝墓と建物跡(5)」『埼玉考古第36号』 P 37~66 埼玉考古学会
- 山岸良二 (編) 1996 『関東の方形周溝墓』 同成社
- 山田尚友・駒見佳容子 1998 『下大久保新田遺跡発掘調査報告書(第4次)』 浦和市遺跡調査会報告書第238集 浦和市遺跡調査会
- 吉田 稔 1991 『小敷田遺跡』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第95集 (財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団